

専門学校への進学希望にみる ノン・メリトクラティックな進路形成

長尾由希子（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

■要約

- ◎専門学校への進学希望は、メリトクラティックな価値観とは異なる意識（ノン・メリトクラティックな意識）に起因する。その意識は、メリトクラティックな価値観を「冷却（cooling-out）」されたというよりも、異なる価値体系を志向するという「代替的加熱（warming-in）」であるといえる。
- ◎「代替的加熱（warming-in）」をさらに詳細に検討すると、将来希望する職業が明確であるかどうかを独立変数に加えた説明モデルがもっとも説明力が高い。将来希望する職業が明確である者は、四大進学・短大進学・就職よりも、専門学校への進学を有意に希望しやすい。
- ◎専門学校進学希望者のうち、希望する職業が明確な者は74.5%だが、そのうちおよそ半数がASUC職業に象徴される実現可能性が高くはない職業を希望している。希望する職業がASUC職業であると、四大よりも専門学校への進学を有意に希望しやすい。ただし、これは職業意識の未熟さを表しているというよりも、高校生が進路と職業の対応関係を正しくとらえているためであるという可能性もある。

1 はじめに

1.1 メリトクラティックな進路形成の揺らぎ——専門学校という進路

すべての高校生が、より難易度の高い進路、より難易度の高い大学を目指して勉強に励む。そして、成績という指標（業績）^{メリット}に応じて、順に進路——四大進学・短大進学・就職——を選び取る（メリトクラシー）。これを原則としつつ、そこに性別や家庭の文化的・経済的状况（属性）および高校のタイプ（トラック）などが影響を与える（中西ほか 1997など）。従来の進路研究は、このような前提において高校生の進路をとらえてきた。つまり、四大進学を頂点とする垂直的で一元的な進路

の序列を想定し、すべての高校生が程度の差こそあれ、一律にその競争に巻き込まれているととらえてきた。

ところが、1990年代半ば以降、生徒が進路指導に乗ってこない、トラッキングが弛緩したといったかたちで、このような従来型の進路形成（メリトクラティックな進路形成）の在り方が揺らいでいることが報告されるようになった（樋田ほか編 2000；荒牧 2001など）。今日では、メリトクラティックな進路形成の在り方が変化しているということは、学校現場においても研究者においても共通の認識になっている。

このような認識が広く共有されるようになった背景には、四大進学を頂点とする垂直的

で一元的な進路体系にコミットしない高校生が増加したという実態がある。それを象徴するものとしてまず注目されたのが、高卒無業者やフリーターという進路であった（粒来 1997; 小杉編 2002など）。高卒無業者やフリーターは、四大進学・短大進学・就職といった従来の進路体系の枠外にあったものであり、その選択は本人が望むと望まないを問わず、メリトクラティックな進路体系からの離脱として注目を集めた。

これに対して、独特のノン・メリトクラティックな進路であるといえるのが、専門学校である。なぜなら、専門学校は高校生には“進学”先の1つとして認識されているが、厳密な意味では今なお学歴にはならず、伝統的な学校制度体系（一条校）の枠外にあるためである¹。

専門学校は非一条校として発足し、当初は高校生の“進学”先とはみなされていなかったが、1990年代以降は高校生の進路の1つとして定着している。現在の専門学校への進学者については、たとえば四大進学者と比べると家庭の経済的な状況は似通っているが成績は低いこと（長尾 2008）、高校のタイプやカリキュラムが専門学校への進学希望に影響を与えること（荒川 2001, 2007; 荒牧 2003）²など、層としての全体的な特徴は指摘されている。

しかしながら、なぜ非一条校である専門学校に進学するのか、高校生の主観レベルでの理由は、十分には明らかになっていない。成績は低いが進学したい、高校が興味関心を重視したカリキュラムや指導を提供している。それだけでは、少子化で大学全入時代といわれる現在に、非一条校である——つまり、制度上アプリアオリにノン・メリトクラティックな性質をもつ³——専門学校へ進学する高校生の行動は、十分に説明することはできない。

1.2 「個人」の進路選択——ノン・メリトクラティックな意識

1.1 で挙げた専門学校への進学行動に関する

先行研究は、主に高校やカリキュラム単位（学科・コースなど）での傾向に注目して進路をとらえてきたといえる。たとえば、あるタイプの高校では〇〇という進路を選びやすい、あるカリキュラムや指導を受けると〇〇という進路を選びやすい、といったとらえ方がそれである。

確かにこのような見方は、四大進学・短大進学・就職といった従来の進路体系における各進路の相対的な位置づけを把握したり、全体としての傾向をとらえたりするには有効である。しかしながら、こと専門学校への進学行動を説明するには、以下に述べるように、高校生個人々の意識、しかもノン・メリトクラティックな意識に注目した分析モデルを設定する必要がある。

まず、高校生個人々の意識に注目する必要性から述べる。

現実の進路選択においては、高校の進路指導やカリキュラムの受け止め方は個人によって異なり、選び取られる進路も、同じ高校やカリキュラムであっても、さらには同じ成績であっても、生徒ごとに異なるものに分化していく。とりわけ、BグループやCグループのような、生徒が多様な進路に進む高校（進路多様校）では、個人の選択によって進路が規定される部分が大きいと考えられる。しかし、先行研究における説明モデルは、こうした個人差をひとまずおいておき、集団としての進路の傾向をとらえてきた。進路を選択し形成するのは個人であるという側面が、十分に説明図式に組み込まれていないのである。1.1 で述べたように、高校生の進路形成の在り方において、従来の進路モデル、つまりメリトクラティックなモデルでは説明できない部分が増加していることを踏まえれば、高校生の意識という要因をモデルに加えて検討することの重要性は増す。

そしてこの際、単なる意識ではなく、ノン・メリトクラティックな意識に注目する必要性がある。

進路形成過程に個人の意識要因を取り入れ

るといって、教育達成や職業達成の説明図式にアスピレーションという概念を導入した、いわゆるウィスコンシン・モデルが想起されるかもしれない (Sewell, Haller & Ohlendorf 1970; Sewell & Hauser 1980)。アスピレーションとは、成績や性別、家庭の経済的事情などの要因と進路を結びつけているメカニズムを解明するため、つまり進路形成過程におけるブラックボックスを個人の意欲という観点で説明するために設定された概念である。

しかしながら、アスピレーションという概念そのものが、四大進学を頂点とする一元的な進路の序列を想定し、そこに向かう意欲の強弱によって定義されている。つまり、アスピレーションとは、メリトクラティックな意識だといえるのである。結果としての進路形成や進路希望も、それを媒介するアスピレーションも、メリトクラティックな在り方を前提にしているという点では相同な枠組みなのである。

そのため、アスピレーションという概念では、進路形成過程の説明はある種のトートロジーに陥りやすい。なぜメリトクラティックな進路形成が揺らいでいるのか、メリトクラティックな原理に代わって一体どのようなメカニズムによって進路形成がなされているのかということをはっきりとすることはできない。アスピレーションというメリトクラティックな意識要因を用いてメリトクラティックな進路体系の揺らぎを分析したところで、あくまでも“進路形成がメリトクラティックな要因では説明できなくなっている”という事実が明らかになるだけであり、なぜノン・メリトクラティックな進路が選ばれるのかを明らかにすることはできないのである。

そこで、従来のメリトクラティックな要因やアスピレーションとは異なる軸 (ノン・メリトクラティックな意識) を設定して分析を行う必要があるといえる。1.1の繰り返しになるが、大学入学の敷居が低くなっている現在に、四大でもなく、修業年限が同じ2年間の短大でもなく、専門学校を選ぶという意識

を説明するには、従来のアスピレーション概念では不十分なのである⁴。

以上から、本章では、専門学校をメリトクラティックな進路形成の揺らぎを象徴する進路 (ノン・メリトクラティックな進路) としてとらえる。そして、専門学校への進学希望が個人レベルではどのようなノン・メリトクラティックな意識から派生しているのかを、具体的に検討する。

2 ノン・メリトクラティックな進路意識

2.1 ノン・メリトクラティックな進路意識に関する諸類型

メリトクラティックな価値体系を受け入れられない場合、代わりに別の価値体系 (ノン・メリトクラティックな価値体系) にコミット

-
- 1 したがって、厳密には専門学校への「進学」とは「入学」というが、日常的な用法にしたがった。以下同。
 - 2 荒川葉 (2001, 2007) は、本調査でいうBグループやCグループのような進路多様校で興味関心を重視する指導が行われている場合、専門学校への進学希望が多くなる傾向を指摘している。荒牧草平 (2003) は、生徒の科目選択における自由度が高く、特定教科に偏らないカリキュラムを提供している高校で、就職に比べて専門学校への進学希望が多くなる傾向を指摘している。
 - 3 学歴を業績とする旧来型のメリトクラティックな価値体系に乗っていないという意味で、非一条校はノン・メリトクラティックな性質をもっているといえる。また、本文中でも述べるように、荻谷剛彦ら (2003) も専門学校への進学者がメリトクラティックな価値観に親和的ではないことを指摘している。脚注4も参照。
 - 4 荻谷ら (2003) は、大都市圏の普通科進路多様校を対象に絞った調査を行い、専門学校への進学者が、メリトクラティックな価値観に親和的ではない意識をもっていることを指摘している。だが、専門学校への進学者がメリトクラティックな価値体系にコミットしていないとして、それでは代わりにどのような価値体系に乗っているのかという点は、依然として明らかにされていない。本章の分析は、進路多様校に限らず様々なタイプの高校を対象にしており、また、専門学校への進学希望者が具体的にどのようなノン・メリトクラティックな意識にコミットしているのかを掘り下げて明らかにするものである。

することになる。このノン・メリトクラティックな価値は、「代替的加熱（warming-in）」と「冷却（cooling-out）」の2種類に類型化することができる（竹内 1995）。

「代替的加熱（warming-in）」とは、学校制度を経由しないでお金持ちになろうとするなど、「メリトクラシー社会の支配的な成功経路と違った成功経路への再加熱」である（同：76）。これに対して「冷却（cooling-out）」とは、そもそも社会的成功を収めるための「投資からの撤退」（同：75）、「メリトクラシー社会の支配的価値からの脱離」を意味している（同：74）。

このノン・メリトクラティックな意識に関する2類型を、専門学校への進学という観点からさらに類型化すると、表3-1のようにまとめることができる。もちろん、こうした類型化はあくまでも理想型として分析の便宜上設定されるものであり、実際の生徒の意識の上ではこれらの組み合わせなど、多様なパターンでの「リアリティの変換」（同：74）がなされる。

まず、「代替的加熱（warming-in）」モデルは、さらに「学歴≠実力視」モデル（モデルⅢ）と「手に職（希望職明確）」モデル（モデルⅣ）に分けることができる。「学歴≠実力視」モデル（モデルⅢ）とは、学歴は実力を反映したものではなく、学歴を経由しない何らかの別の能力が存在するという考え方である。「手に職（希望職明確）」モデル（モデルⅣ）とは、学歴に象徴されない能力の存在

を想定する点では同じだが、その能力を具体的な職業技術を身につけることで発現しようとする考え方である。いずれも学校（この場合、大学・短大などのいわゆる一条校）という、制度化されたルートを経由しないかたちでの生き方を認め、アスピレーションを保持している。

一方、「冷却（cooling-out）」モデルは、さらに「脱・上昇志向」モデル（モデルⅤ）と「勉強拒否」モデル（モデルⅥ）に分けることができる。「脱・上昇志向」モデル（モデルⅤ）とは、社会的な地位や名誉を得るために努力し続けることを忌避する考え方を指す。「勉強拒否」モデル（モデルⅥ）とは、努力をしてより難易度の高い学校への進学を目指すことを拒否する考え方である。いずれもアスピレーションを加熱するという価値自体から降りている。なお、「勉強拒否」モデル（モデルⅥ）は、質問項目の制約上、進学希望者に絞った分析となる。

以上のノン・メリトクラティックな意識に基づく4類型（モデルⅢ～Ⅵ）と合わせて比較するのは、従来のメリトクラティックな先行研究の枠組みによる基本モデル（モデルⅠ）と、高校進路指導モデル（「やりたいこと重視指導」モデル＝モデルⅡ）である。

高校進路指導モデル（モデルⅡ）は、基本モデルであるメリトクラシーモデル（モデルⅠ）に、高校の進路指導の受け止め方という要因を加えたモデルである。生徒の興味関心を重視した指導を行う高校では、専門学校へ

表3-1 専門学校への進学希望を想定した進路規定モデル

基本モデル（メリトクラシーモデル）	属性+業績		モデルⅠ
高校進路指導モデル	「やりたいこと重視指導」モデル		モデルⅡ
個人モデル （ノン・メリトクラシーモデル）	「代替的加熱」モデル	「学歴≠実力視」モデル	モデルⅢ
		「手に職（希望職明確）」モデル	モデルⅣ
	「冷却」モデル	「脱・上昇志向」モデル	モデルⅤ
		「勉強拒否」モデル（※就職者のぞく）	モデルⅥ

の進学希望が多いという先行研究の知見を踏まえたモデルではあるが（荒川 2001, 2007など）、先行研究とは異なり、生徒個人の主観的評価による変数である。これを用いることで、1.2で述べたような、個人によって実際に受ける指導が異なっていたり、同じ指導でも受け止め方が異なったりするという現実を反映させることができる。具体的には3.1で定義を行う。

2.2 分析課題および分析手法

次の3節における課題は、2.1で挙げたモデルⅠ～Ⅴの中から⁵、専門学校を含む進路希望を説明するためにもっとも適切なモデルを選ぶことである。これはさらに以下の2つの課題に分けることができる。

分析課題 1

まず、モデルⅠおよびモデルⅡを、ノン・メリトクラティックな意識に基づく3類型（モデルⅢ～Ⅴ）の比較対照群にする。これにより進路希望を説明する枠組みとして、旧来型のメリトクラシーな変数によるモデル（モデルⅠ）がもっとも説明力が高いのか、それとも高校進路指導認知の変数を加えたモデル（モデルⅡ）の説明力が高いのか、あるいは生徒個人のノン・メリトクラティックな意識によるモデル（モデルⅢ～Ⅴ）の説明力が高いのかどうかを明らかにする。

分析課題 2

そして、モデルⅠ・Ⅱの説明力よりもノン・メリトクラティックな意識によるモデル（モデルⅢ～Ⅴ）の説明力が高い場合、具体的にどのような意識の説明力が高いのかを明らかにする（モデルⅢ～Ⅴのうち、最適なモデルを選ぶ）。

分析手法は、多項ロジットを用いる。進路研究では、進路に関する変数は教育年数に換算し、量的な変数として扱うことが多い。しかしこうした分析は、短大と専門学校のよう

に、教育年数は同じでも質的に異なる選択肢を含む場合には有効ではない。そこで、カテゴリカルな従属変数を扱う際に用いられる手法である、多項ロジットモデルによる分析を行う（Breen & Jonsson 2000など）。

3 専門学校への進学希望に関する分析

3.1 分析に用いる変数

本節では、モデルⅠ～Ⅶを多項ロジットによって検討するが、従属変数は共通であり（専門学校進学を基準とし四大進学・短大進学・就職）⁶、独立変数のみモデルごとに異なる。そこで、以下ではモデルごとに独立変数のみを説明する。分析に用いた変数および記述統計量の一覧は、章末（p.123）に参考表1として付した。

まず、基本モデル（モデルⅠ）は、従来の進路研究におけるオーソドックスなメリトクラシー観によってたつモデルで、性別、成績、高校グループといった要因を独立変数としている。性別は女子ダミー（Q1Aより「女子」=1、「男子」=0として作成）、成績は全国における自分の成績を5段階で答えたものの（Q10B）、高校グループについては、Cグループを基準にAグループダミーおよびBグループダミーの2つのダミー変数を作成した。モデルⅡ以降は、モデルⅠの独立変数にそれぞれ1つ変数を追加したものであるため、追加した変数についてのみ、説明を行う。

「やりたいこと重視指導」モデル（モデルⅡ）では、やりたいこと重視指導ダミーを投じた。通っている高校が「やりたいことを見つめるように指導している」という項目（Q13B）に、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と答えた者を「あてはまる」=1、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまら

5 モデルⅥは分析対象が進学希望者に限られるため、比較対象からは外す。

6 ただし、モデルⅦは就職者をのぞくため、専門学校進学を基準とし四大進学・短大進学とする。

ない」と答えた者を「あてはまらない」=0としてダミー変数を作成した。

「学歴≠実力視」モデル（モデルⅢ）では、解釈の便宜上、学歴=実力視ダミーを投じた。これは、「学歴は本人の実力をあらわしている」という項目（Q38C）に「とても思う」「まあ思う」と答えた者を「思う」=1、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と答えた者を「そう思わない」=0としたダミー変数である。

「手に職（希望職明確）」モデル（モデルⅣ）では、希望職明確ダミーを投じた。これは「将来やりたい仕事がどれくらい具体的に決まっていますか」という質問（Q43）に「はっきりと決まっている」「なんとなく決まっている」と答えた者を「明確である」=1、「考えてはいるが、まだ決まっていない」「考えたことがない」と答えた者を「明確ではない」=0として作成したダミー変数である。

「脱・上昇志向」モデル（モデルⅤ）では、解釈の便宜上、上昇志向度変数を投じた。これは、「社会的な地位や名誉のある人間になりたい」という項目（Q45A）と「他人に負けないようにがんばり続けたい」という項目（Q45C）について、それぞれ「とても思う」から「まったくそう思わない」の4段階尺度になっている回答を、尺度の上下を逆にして足し合わせたものである。最低1から最高8まで8段階の値をとる。

「勉強拒否」モデル（モデルⅥ）には、勉強&挑戦ダミーを投じた。「自分にとって進学するのが難しい学校に一生懸命勉強して挑戦したい」という項目（Q42 SQ1）に「とてもあてはまる」「まああてはまる」と答えた者を「あてはまる」=1、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と答えた者を「あてはまらない」=0としてダミー変数を作成した。この質問は回答対象者が進学希望者に限られるため、他のモデルと直接的な比較はできない。そのため、分析結果は参考として付すにとどめる。

3.2 分析結果

以上の変数およびモデルにより進路希望に関する多項ロジットを行い、有意になった変数と回帰係数の符号などをまとめたものが表3-2である。モデルⅠ～Ⅵのいずれも、0.1%水準で有意であった（ $p=0.000$ ）。より詳細な結果は、章末（p.124）に参考表2として付した。

本項では、紙幅の都合上、すべてのモデルについて結果の解釈を行うことはしない。まずはモデルの説明力を検討し、最適なモデルを選ぶ。そしてその最適なモデルについてのみ、詳細な解釈を行う。

モデルの説明力は、McFaddenの疑似決定係数をもとに検討する。この値が大きいモデルほど、説明力が高い。説明力がもっとも高いモデルを最適なモデルとして選択する。

表3-2のMcFaddenの疑似決定係数の値を比較すると、モデルⅡ～Ⅴのいずれも基本モデルであるモデルⅠよりも説明力が高い。つまり、進路を規定する要因は、従来のようにメリトクラティックな変数のみで説明するよりも、高校の進路指導の個人単位での受け止め方や、ノン・メリトクラティックな要因を加えて説明するほうが、よりよく説明できるといえる（分析課題1）。

さらに、McFaddenの疑似決定係数の値がもっとも大きいのは、「手に職（希望職明確）」モデル（モデルⅣ）である。したがって、専門学校を含む進路希望をもっともよく説明するノン・メリトクラティックな意識は、希望職が明確であるかどうかという意識だといえる（分析課題2）。

表3-2からわかるように、「手に職（希望職明確）」モデル（モデルⅣ）では、四大・短大・就職いずれの希望進路においても、基本モデルと同じ変数に加え、希望職明確ダミーが有意に負の効果をもっている。以下、「手に職（希望職明確）」モデル（モデルⅣ）について解釈を行っておく。

四大進学希望を専門学校進学希望と比較すると、次のようにいえる。女子は男子よりも

四大進学を希望しにくく、専門学校進学を希望しやすい(一)。成績が高いほど、専門学校進学よりも四大進学を希望しやすい(十)。AグループやBグループなど、過去に四大進学者が比較的多い高校に在籍している生徒ほど、専門学校進学よりも四大進学を希望しやすい(十)。ここまでは基本モデル(モデルⅠ)と同様である。さらに、希望職が明確である者はそうではない者に比べて、四大進学を希

望しにくく専門学校進学を希望しやすい(一)。

短大進学希望を専門学校進学希望と比較すると、次のようにいえる。女子は男子よりも短大進学を希望しやすく、専門学校進学を希望しにくい(十)。成績が高いほど、専門学校進学よりも短大進学を希望しやすい(十)。高校のタイプについては、Bグループの高校の生徒はCグループの高校の生徒よりも短大進学を希望しにくく、専門学校進学を希望し

表3-2 希望進路の規定要因に関する分析結果(モデルⅠ～Ⅵ)

	基本モデル (メリトクラシー モデル)	高校進路指導モデル		個人モデル (ノン・メリトクラシーモデル)			
		「やりたいこと重視 指導」モデル	「代替的加熱」モデル		「冷却」モデル		【参考】 「勉強拒否」モデル (※対象は進学希望者の のみ。就職者はのぞく)
			「学歴≠実力視」 モデル	「手に職(希望職 明確)」モデル	「脱・上昇志向」 モデル	【参考】 「勉強拒否」モデル (※対象は進学希望者の のみ。就職者はのぞく)	
モデルⅠ	モデルⅡ	モデルⅢ	モデルⅣ	モデルⅤ	モデルⅥ		
【説明に用いた変数】 (属性・業績)	性別(女子ダミー) Q1A 成績(全国) Q10B 高校グループ(A・B・C) 基準:C	○	○	○	○	○	
(ノン・メリトクラ ティックな要因)		やりたいこと重視 指導ダミー Q13B	学歴=実力視 ダミー Q38C	希望職明確ダミー Q43	上昇志向度 Q45A&Q45C ($\alpha=0.733$)	勉強&挑戦ダミー Q42SQ1	
【分析結果】 (基準:専門学校)							
四大	女子ダミー - 成績 + Aグループダミー + Bグループダミー +	基本モデル プラス やりたいこと 重視指導ダミー +	基本モデル プラス 学歴=実力視ダミー +	基本モデル プラス 希望職明確ダミー -	基本モデル プラス 上昇志向度 +	基本モデルと同	
短大	女子ダミー + 成績 + Bグループダミー -	基本モデルと同	基本モデルと同	基本モデル プラス 希望職明確ダミー -	基本モデルと同	基本モデルと同	
就職	女子ダミー - Bグループダミー -	基本モデルと同	基本モデルと同	基本モデル プラス 希望職明確ダミー -	基本モデルと同		
N	1,209	1,195	1,199	1,185	1,190	1,079	
df	12	15	15	15	15	10	
-2 Log likelihood	202.183	306.093	303.711	300.618	541.422	196.877	
Chi-sq	587.884	595.159	586.450	640.715	586.511	397.477	
McFadden	0.282	0.289	0.284	0.314	0.287	0.308	

注1) すべてのモデルが $p=0.000$ で有意。

注2) 「基本モデルプラス」とは、基本モデル(モデルⅠ)で有意になった変数すべてが有意であることに加え、他の変数も有意であることを表す。「基本モデルと同」とは、基本モデル(モデルⅠ)で有意になった変数と同じ変数が有意であることを表す。表3-4も同様。

やすい(一)⁷。しかし、Aグループの高校とCグループの高校の間には有意な差がない⁸。ここまでは基本モデル(モデルⅠ)と同様である。加えて希望職が明確である者はそうではない者に比べて、短大進学を希望しにくく専門学校進学を希望しやすい(一)。

就職希望を専門学校進学希望と比較すると、次のようにいえる。女子は男子よりも就職を希望しにくく、専門学校進学を希望しやすい(一)。Bグループの高校の生徒はCグループの高校の生徒よりも、就職を希望しにくく、専門学校進学を希望しやすい(一)⁹。Aグループの高校とCグループの高校の間には有意な差がない¹⁰。ここまでは基本モデル(モデルⅠ)と同様である。加えて希望職が明確である者はそうではない者に比べて、就職を希望しにくく専門学校進学を希望しやすい(一)¹¹。

重要な点は、専門学校進学希望を、四大進学希望・短大進学希望・就職希望いずれの進路希望と比べた場合にも、成績や高校のタイプを統制してもなお、希望職明確ダミーが単独で有意な効果をもっているということである。つまり、希望職が明確である(と意識している)生徒は、成績や高校のタイプとは独立に、他の進路(四大進学・短大進学・就職)よりも専門学校への進学を希望しやすいといえるのである。

以上から、専門学校への進学は、メリトクラティックな価値体系から脱却して野心が「冷却(cooling-out)」された結果、消極的に選ばれるというよりも、四大進学を頂点とする垂直的で一元的な進路体系に乗らず、「手に職」、職業を通して身を立てようという、「代替的加熱(warming-in)」の一種の意識によって選ばれる進路であるといえる。

以上の解釈は、2.1で述べた通り個々の生徒が多様な動機で進路選択をしている現実を否定するものではない。この点について、補足的に解釈をしておく。

モデルⅢ、Ⅴともに0.1%水準で有意であり、モデルⅢの学歴=実力視ダミーも、モデ

ルⅤの上昇志向度も、いずれも四大進学希望と専門学校進学希望を比較した場合には有意である(表3-2)。これは、「学歴≠実力視」という考えで専門学校への進学を希望する生徒も、「脱・上昇志向」の考えで専門学校への進学を希望する生徒も存在し、かつ、そのような意識は四大よりも専門学校への進学希望を有意に高めているということの意味する¹²。ただ、こうした考えよりも希望職が明確であるという意識のほうが、説明力が高いということである。

さらに補足すると、短大進学希望や就職希望と専門学校進学希望を比較すると、学歴=実力視ダミーと上昇志向度、いずれの変数も有意ではない。ここから、ノン・メリトクラティックな意識は、四大進学希望と専門学校進学希望の比較においては規定要因となるが、それ以外の進路では希望職が明確であるという意識以外は規定要因にはならないといえる。

また、モデルⅥにおいて、進学希望者の間では成績は有意に正の効果をもつが、勉強&挑戦ダミーが有意ではないことから、少なくとも生徒本人の主観としては“(四大・短大進学希望者よりも)成績が低いものの進学したい、しかし勉強することは嫌いだから専門学校に行く”という消極的な意識ではないことがわかる。

4 専門学校進学希望者における“明確な職業希望”

4.1 希望職が明確な専門学校進学希望者

ここまでの分析で、希望職が明確であると専門学校への進学を希望しやすいことがわかった。図3-1は、希望進路別に、希望する職業が明確か否か(3節の分析で用いた希望職明確ダミー)をクロス表分析し、結果を図示したものである(χ^2 検定: $df=3$, $p=0.000$)¹³。希望職が明確な者は、四大進学希望者では49.4%、短大進学希望者では53.6%、就職希望者では42.3%なのに対し、専門学校進学希

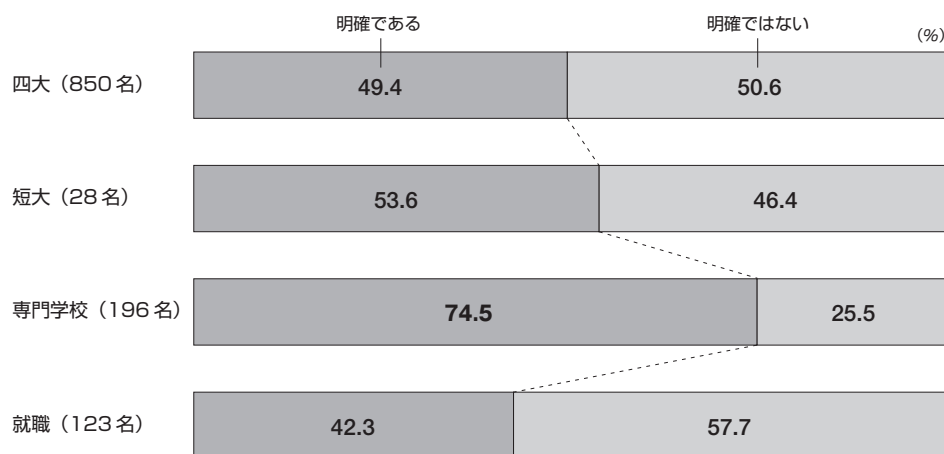
望者では74.5%と圧倒的に多い。改めて、専門学校への進学希望者には希望職が明確な者が多いことがわかる。

一般的に、希望職が明確であることは好ましいことだとされている。そのため、進路指導においても、希望する職業を明確にすることが当然のように目指される。また、専門学校では専攻が職業に対応して個別具体的に細分化されていることを踏まえれば、入学段階で希望職が明確であることは極めて重要なことである。その意味で、専門学校進学希望者において希望職が明確な者が多いことは、一見積極的に解釈できそうである。

しかしながら、希望職が明確であることは、手放しに評価できることなのであろうか。実現可能性を考えないで職業を希望することにはリスクも伴う（荒川 2007など）。次項では、希望職が明確であるということの内実について、荒川葉（2007）の概念をもとに検討する。

- 7 ただし、今回の調査対象校においてBグループの高校が2校しかなく、なおかつ両校の進路希望パターンが大きく異なるためである可能性がある（章末p.125 参考図1を参照）。
- 8 これはAグループの高校で短大進学を希望する者が1%未満と極めて低い値をとるためであると考えられる（参考図1を参照）。
- 9 脚注7に同じ。
- 10 Aグループの高校で就職を希望する者が1%未満と極めて低い値をとるためであると考えられる（参考図1を参照）。
- 11 就職者において希望職が専門学校進学者よりも明確ではないことは、それ自体問題を含むものの、本章の関心からは逸れるため、立ち入らない。
- 12 なお、同じく四大進学希望と専門学校進学希望を比較した場合に、モデルⅡのやりたいこと重視指導ダミーが有意に正の効果をもっている。これは、興味関心を重視する指導がなされると専門学校よりも四大進学を希望しやすいという、先行研究に反する知見であるというよりも、本調査対象校において、Aグループなど四大進学者が多い高校ほど、有意にやりたいこと重視指導を行っている（と生徒に認識されている）ことを反映していると思われる（表は略。 χ^2 検定： $df=2, p=0.000$ ）。
- 13 サンプル数不足のため、図3-1の分析を高校グループ別に検討することはできなかった。代わりに章末（p.125）参考表3を参照。

図3-1 希望進路別にみた希望する職業の明確さ



4.2 “明確な職業希望”の内実——ASUC 職業

この10年ほど、高校生が実現可能性の低い職業を希望する傾向が指摘されている（荒川 2007; 片瀬 2005など）。希望する職業が明確であるといっても、退路を断って実現可能性の低い職業に賭けることにはリスクが伴う。このような“実現可能性が低い職業”の定義は、論者によって若干異なる。

たとえば、片瀬一男（2005）は、「音楽家・舞台芸術家・職業スポーツ家」を志望する男子高校生が増加しているとして注目し、こうした志向を「著名人アスピレーション」と呼ぶ（同: 171）。片瀬はこれを、「学歴とい

う制度化された地位達成の手段を忌避する」 「アノミー型アスピレーション」（同: 179）であるとしている。

この「学歴という制度化された地位達成の手段」（同: 179）に依拠しないという性質が、特定の職業自体に織り込まれている点に注目したのが荒川（2007）であるといえる。

荒川（2007）は、「生徒には人気がある」が「実際の職業人口から見れば希少」で「学歴不問」の職業を、attractive・scarce・uncredentialedの頭文字をとってASUC職業¹⁴と呼び、「メリトクラティックな進路形成と切れた実現可能性の低い夢」だと指摘している（同: 26-7）。荒川（2007）は、2001年に首都圏Z県34校の高校2年生4,376人を対象にした質問紙調査により、多変量解析ではないものの、ASUC職業への志向が専門学校への進学希望と結びついていることを指摘している。

本節では、ASUC職業の希望と高校卒業後の希望進路の関係について、多変量解析によって検討を行う。これにより、他の要因を統制した上でもなおASUC職業への志向が専門学校への進学希望と結びついているのかどうかを分析することができる。

生徒の希望する職業を具体的にたずねている調査は必ずしも多くない。しかし、本調査データでは、「将来やりたい仕事はどれくらい具体的に決まっていますか」という質問項目（Q43）において、「はっきりと決まっている」「なんとなく決まっている」と回答した者に、希望する職業を自由記述で記入させている。さらに本調査は、2節および3節で検討したように、専門学校への進学理由にかかわる質問項目も多く含んでいる。この点で貴重なデータであるといえる。

荒川（2007）の定義に沿うように抽出した本調査におけるASUC職業を一部挙げると、表3-3の通りである¹⁵。希望する職業が明確な者のうち、具体的な記述がないなどの欠損値をのぞくと、ASUC職業希望者は191名、非ASUC職業希望者は447名であった。ASUC職業と非ASUC職業の比率はおおよそ3:7で

表3-3 本調査におけるASUC職業の具体例 (ASUC職業希望者191名中、主要なもの)

ASUC 職業（主なもの）	人数（のべ）
「アパレル関係」「ファッション関係」「服飾関係」など	16
「デザイナー」	6
「音楽関係」「音楽に関わる仕事」など	15
「バンド」	5
「プロ奏者」（「ギタリスト」など）	3
「ミュージシャン」	2
「スポーツ関係」「スポーツにかかわる仕事」など	11
「スポーツインストラクター」「スポーツトレーナー」など	8
「プロスポーツ選手」（「プロ野球選手」など）	3
「美容関係」「美容系」「美容」など	10
「ネイリスト」など	3
「エステティシャン」など	2
「メイクアップアーティスト」	1
「動物関係」「動物に関わる仕事」など	10
「ペットリマー」	3
「犬の訓練士」など	3
「歌手」	5
その他の芸能人（「タレント」「モデル」「漫才師」など）	5
「ダンサー」	4
「俳優」	3
「パティシエ」	9
「声優」	8
「ブライダルプランナー」「ウエディングプランナー」	7
「ゲームクリエイター」「ゲームプログラマー」など	6
「小説家」	5
「美術関係」「美術系の仕事」など	4
「芸術家」	3
「イラストレーター」	5
「漫画家」	4
「カメラマン」	3

あり、これは荒川（2007）における比率よりもやや高かった¹⁶。

図3-1における希望する職業が「明確」な者について、ASUC職業希望と非ASUC職業希望に分けて再び図示したものが、図3-2である。

図3-1および図3-2からは、確かに荒川（2007）が指摘したように、専門学校への進学希望者において希望する職業が明確な者が多く、そのうちほぼ半数という高い比率でASUC職業を希望している者がいることがわかる。しかし、これらは単変量の分析結果であり、他の変数を統制した上での結果ではない。そこで次項では多変量解析によって検討する。

14 荒川（2007）は、「その職業を希望している生徒の割合を生徒全体に対する人数比として出しておき」「国勢調査からその職業についている人の割合を全職業人口に対する人数比」で割った値（同：76）を調査対象生徒の希望倍率とし、希望倍率が5倍以上で大学・大学院卒の割合が70%以下の職業をASUC職業として定義し（同：78）、具体的に例示している（同：74-80）。

なお、本節では同一個人の回答でASUC職業と非ASUC職業が併記されていた場合は、非ASUC職業として数えた。たとえば、「中学校国語教師、

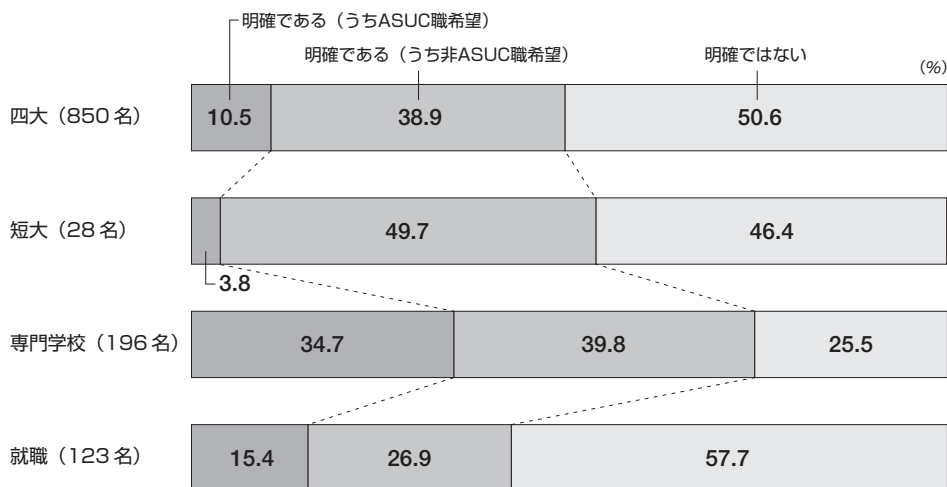
アニメーションクリエイター」と回答した者は、非ASUC職業希望者として数えた。これは荒川（2007）が、「高い学歴を獲得していれば他の職業につきやすい」（同：78）、メリトクラシーとは「別な価値観にそって進路を選択するうちに業績主義的な競争に参加する機会を喪失する可能性がある」（同：84）として、ASUC職業を目指すことで、いわば“つぶし”が効かなくなるリスクを指摘していることを踏まえたものである。非ASUC職業もあわせて希望している限りにおいて、リスクは多少なりとも軽減されると判断した。

また、たとえば「アパレル関係」「ファッション関係」「服飾関係」という表現は曖昧ではあるが、ASUC職業と判断した。縫製工場の生産ラインで働く、あるいは小売量販店でレジ接客を行うというような、実現可能性が高い仕事を指して記述した可能性もなくはないが、ここでは低いと判断したためである。

15 表3-3は、脚注14のようにして取り出したASUC職業希望者のうち、希望する職業の自由記述を数え上げたものである。たとえば、「『ダンサー』『歌手』」と回答した者は、「ダンサー」と「歌手」それぞれに1件として計上してある（この意味での「のべ」件数である。多項ロジットでは重複して処理していない。脚注14も参照）。表内の罫線は、似た職業のまとまりごとに引いたものである。たとえば、「デザイナー」の6名は、「『アパレル関係』『ファッション関係』」の16名の内訳の再掲ではない。あくまでも「デザイナー」と明記した者を、「『アパレル関係』『ファッション関係』」とは独立に数えている。

16 荒川（2007）の調査では、「ASUC職業」が18.9%、「その他の職業」が57.2%、「DK・NA」が23.9%であった（同：80）。

図3-2 希望進路別にみた希望する職業の明確さ（ASUC職／非ASUC職希望）



4.3 ASUC職業の希望と専門学校への進学希望

本項では、希望する職業が明確な者のうち、ASUC職業を希望することが専門学校への進学希望に影響するのかどうかを、多項ロジットによって検討する。もともと少ない短大進学希望者のうち、さらにASUC職業を希望する者はほとんどいなかったため、分析対象は四大進学希望・専門学校進学希望・就職希望の者に絞る。そのため、この「ASUC職希望」モデル（モデルⅦ）は、「手に職（希望職明確）」モデル（モデルⅣ）の変形版ではあるが、対象が異なるため、説明力を比べることはできない。

分析にあたっては、基本モデル（モデルⅠ）と同じ変数に加え、ASUC職希望ダミーを投じた。ASUC職希望ダミーは、「将来やりたい仕事がどれくらい具体的に決まっています

か」という質問（Q43）に対して、「はっきりと決まっている」「なんとなく決まっている」と答えた者の自由記述を分類し、「ASUC職希望」= 1、「非ASUC職希望」= 0として作成したダミー変数である。

モデルⅦの分析結果を表3-2と同様にまとめたものが、表3-4である。分析に用いた変数や分析結果の詳細については、章末に参考表1および参考表2として付した。

まず四大進学希望を専門学校進学希望と比較すると、次のようにいえる。女子は男子よりも四大進学を希望しにくく、専門学校進学を希望しやすい（-）。成績が高いほど、専門学校進学よりも四大進学を希望しやすい（+）。AグループやBグループなど、四大進学者が過去に比較的多い高校に在籍している生徒ほど、専門学校進学よりも四大進学を希望しやすい（+）。ここまでは基本モデル（モ

表3-4 希望進路の規定要因に関する分析結果（モデルⅦ）

	基本モデル (メリトクラシーモデル) 〔再掲〕	個人モデル（ノン・メリトクラシーモデル）	
		「代替的加熱」モデル	
		「手に職（希望職明確）」 モデル〔再掲〕	うち 「ASUC職希望」モデル (※対象は希望職明確な者)
	モデルⅠ	モデルⅣ	モデルⅦ
【説明に用いた変数】 (属性・業績)	性別（女子ダミー） Q1A 成績（全国） Q10B 高校グループ（A・B・C） 基準：C	○ ○ ○	○ ○ ○
(ノン・メリトクラ ティックな要因)		希望職明確ダミー Q43	ASUC職希望ダミー (Q43_sq)
【分析結果】 (基準：専門学校)			
四大	女子ダミー - 成績 + Aグループダミー + Bグループダミー +	基本モデル プラス 希望職明確ダミー -	基本モデル プラス ASUC職希望ダミー -
短大	女子ダミー + 成績 + Bグループダミー -	基本モデル プラス 希望職明確ダミー -	
就職	女子ダミー - Bグループダミー -	基本モデル プラス 希望職明確ダミー -	女子ダミー -
N	1,209	1,185	547
df	12	15	10
-2 Log likelihood	202.183	300.618	167.432
Chi-sq	587.884	640.715	309.687
McFadden	0.282	0.314	0.349

注) すべてのモデルが $p=0.000$ で有意。

デルⅠ)と同様である。さらに、ASUC職業を希望している者は、そうではない職業を希望している者に比べて、四大進学を希望しにくく専門学校進学を希望しやすい(一)。

就職希望を専門学校進学希望と比較すると、次のようにいえる。女子は男子よりも就職を希望しにくく、専門学校進学を希望しやすい(一)。他方、高校のタイプやASUC職業を希望しているかどうかは就職希望と専門学校進学希望の違いには影響をおよぼさない¹⁷。ASUC職業を希望するという要因は、四大進学希望と専門学校進学希望の間においてのみ、有意差をもたらすものであることがわかる。

「手に職(希望職明確)」モデル(モデルⅣ)と合わせて解釈すると、次のようにいえる。

希望する職業が明確な者は、四大進学、短大進学、就職を希望するよりも、専門学校への進学を希望しやすい。さらに、希望する職業がASUC職業である場合、四大よりも専門学校への進学を希望しやすい。

5 まとめと考察

5.1 考察

本章の分析結果を専門学校への進学希望という観点から考察すると、次のようにいえる。

専門学校への進学希望は、メリトクラティックな要因よりも生徒個人のノン・メリトクラティックな意識で、より説明される進路である。そしてそれは、従来のメリトクラティックな価値観から脱したり降りたりという態度(「冷却(cooling-out)」)であるというよりも、希望する職業が明確であるという意識、既存の学歴・学校制度に依拠しない別の価値体系や生き方への志向という「代替的加熱(warming-in)」の一種に分類できる意識である。希望する職業が明確な者は、他の変数を統制した上でもなお、四大進学・短大進学・就職よりも専門学校への進学を有意に希望する。よって、荒川(2001, 2007)が示唆したように、専門学校は自尊心を傷つけられたり希望を失ったりすることなく、積極的な姿勢で

選ばれている進路であるといえる¹⁸。

しかし、そこで生徒自身に認識されている“明確な職業希望”とは、ASUC職業に象徴されるような、実現可能かどうか定かではない職業を意味することが多い。希望していた職業に就くことのできる可能性が低いということに直面したとき、期待に満ちて積極的に専門学校という進路を選んだ分、高校段階で意欲が「冷却(cooling-out)」されていた場合よりも絶望感が大きくなる可能性も考えられる。もちろん、当初の希望職業とは完全に同じではなくとも、間接的に何らかのかたちで希望していたものと大なり小なり接点のある仕事に就くことができる場合もあり、満足感を得られる場合もある。しかし、その場合でも初めから情報を知っていた場合とそうではなかった場合とで、受け止め方が異なってくると考えられる。

もちろん、どのような職業や進路を希望するのかということは個人の自由であり、どのような職業や進路にもリスクは伴う。さらに、実現可能性とは別に、その職業で食べていくことができるのかどうかという問題もある。実現可能であるが、入職が非正社員であり、その後も給料や待遇の上昇が見込めないというような職業も多く存在する。しかし、個人の選択は尊重されねばならない。また、何が幸せかは十人十色である。高校の進路指導は、このような一般的なリスクの認知・指導と、眼前の生徒一人ひとりの希望の狭間で葛藤しているというのが実情なのである。しかし、その指導に必要な情報や指針は乏しく、現場

17 AグループダメーもBグループダメーも有意ではないのは、Aグループで就職希望者がほとんどいないことと、BグループとCグループにおいて希望する職業が明確な者やASUC職業を希望する者の比率がほぼ同じこと(章末p.125 参考表3参照)によると思われる。

18 ただし、荒川(2007)は「冷却(cooling-out)」だと解釈しているが、本章の分析から明らかになったのは、「冷却(cooling-out)」というよりも「代替的加熱(warming-in)」という結果である(本章2・3節、竹内1995: 77および荒川2007: 26参照)。

は手探りの状態である。

フリーターという明らかにノン・メリトクラティックな進路は問題化されやすかった。専門学校というノン・メリトクラティックな進路は、一見希望する職業が明確である分、指導が別の困難性を伴うのである。

しかしながら、こうした問題の解決策がよくいわれるメリトクラティックな進路や価値観への再編成でいいのかどうか、大学進学指導の強化でいいのかどうかは、少なくとも学問的には、短期的に早急な答えを下すべきではない問題であると思われる。

5.2 今後の課題

本章では荒川（2007）のASUC職業概念に依拠して、職業の実現可能性を考察した。しかし、本章におけるASUC職業の分類（特に「～関係」という表現の希望職）は、論者により判断が分かれるものもあろうし、ASUC職業という概念にも検討の余地があると思われる。

ASUC職業はその定義自体に学歴要件を含んでおり¹⁹、そのためにASUC職業を希望する者は、四大進学希望者に少なく専門学校進学希望者に多くなりやすいということも考えられる。つまり、高校生は自身の希望進路に対応した職業選択、あるいは自身の希望職業に対応した進路選択を（むしろ適切に）しているということかもしれないのである。ASUC職業は、専門学校という教育機関の在り方や特定の職業に織り込まれたリスクを読み込んだ概念であるともいえるのである。また、た

例えば翻訳家や研究職など、大学・大学院卒の割合が70%以上であっても、競争率が高く、実現可能性が低い職業も多い。そのため、そうした職業のみを目指し続ける限りリスクはあり、学歴要件は実はクリティカルなポイントではないという見方もできる。つまり、厳密な意味でASUC職業かどうかということ自体よりも、高校生が希望する進路や職業の実現可能性、そして実現できなかった場合のリスクに関する認識、あるいは実現可能性とは別の情報が、生徒自身も含め、広く教育現場では共有されていないようにみえることと、リスクの回避やフォローが可能な体制を整備することが重要な課題であると思われる。

また、本章の分析においてはサンプル数が少なくなることを避け、独立変数に家庭の経済的・文化的な変数を投入しなかった。しかし、家庭の経済的・文化的な状況は、依然として高校生の進路選択における重要な要因であり続けている。本章の分析結果は、経済的・文化的な変数を加えていないものであることを踏まえ、経済的・文化的な変数を投入した場合の結果と合わせて解釈を行う必要がある。その際には、経済的・文化的な変数が直接的に進路を規定するという観点だけではなく、アスピレーションや意欲といった意識・志向性にも影響をおよぼす（荻谷 2001; 片瀬 2005）という構造も想定し、検討を行う必要があると考えられる。

19 脚注14参照。

<引用文献>

- 荒川（田中）葉、2001、「高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容——新たな選抜・配分メカニズムの誕生」『教育社会学研究』68: 167-85。
———、2007、「『夢追い』型進路形成の功罪——高校『個性化・多様化』政策の帰結の社会学的分析」お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士論文。
荒牧草平、2001、「学校生活と進路選択——高校生活の変化と大学・短大進学」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学——進路・生活・世代』ミネルヴァ書房、63-80。
———、2003、「現代都市高校におけるカリキュラム・トラッキング」『教育社会学研究』73: 25-42。
Breen, Richard & Jonsson, Jan O., 2000, "Analyzing Educational Careers: A Multinomial Transition Model," *American Sociological Review*, 65(5): 754-72。
樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編、2000、『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。
荻谷剛彦、2001、『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂高文社。
荻谷剛彦・濱中義隆・大島真夫・林未央・千葉勝吾、2003、「大都市圏高校生の進路意識と行動——普通科・進路

多様校での生徒調査をもとに『東京大学大学院教育学研究科紀要』42: 33-63.
 片瀬一男、2005、『夢の行方——高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会。
 小杉礼子編、2002、『自由の代償／フリーター——現代若者の就業意識と行動』日本労働研究機構。
 長尾由希子、2008、『専修学校の位置づけと進学者層の変化——中等後教育機関から高等教育機関へ』『教育社会学研究』83 (近刊、ページ未定)。
 中西祐子・中村高康・大内裕和、1997、『戦後日本の高校間格差成立過程と社会階層——1985年SSM調査データの分析を通じて』『教育社会学研究』60: 61-82。
 Sewell, W. H., A. O. Haller & G. W. Ohlendorf, 1970, "The Educational and Early Occupational Status Attainment Process: Replication and revision," *American Sociological Review*, 35(6): 1014-27.
 Sewell, W. H. & R. M. Hauser, 1980, "The Wisconsin Longitudinal Study of Social and Psychological Factors in Aspirations and Achievements," A.C. Kerckhoff ed., *Research in Sociology of Education and Socialization*, 1: 59-99.
 竹内洋、1995、『日本のメリトクラシー——構造と心性』東京大学出版会。
 粒来香、1997、『高卒無業者層の研究』『教育社会学研究』61: 185-209。

<補足：参考図表>

参考表 1 多項ロジットにおける使用変数一覧

モデルⅠ (基本モデル)		平均値	S.D.
性別 (女子ダミー)	女子=1、男子=0	0.484	0.500
成績 (全国)	5段階	2.225	1.053
高校グループ (基準：Cグループ)			
Aグループダミー	Aグループ=1、その他=0	0.462	0.499
Bグループダミー	Bグループ=1、その他=0	0.182	0.386

モデルⅢ (「学歴≠実力視」モデル)		平均値	S.D.
性別 (女子ダミー)	女子=1、男子=0	0.484	0.500
成績 (全国)	5段階	2.226	1.052
高校グループ (基準：Cグループ)			
Aグループダミー	Aグループ=1、その他=0	0.461	0.499
Bグループダミー	Bグループ=1、その他=0	0.182	0.386
学歴=実力視ダミー そう思う=1、そう思わない=0		0.447	0.497

モデルⅤ (「脱・上昇志向」モデル)		平均値	S.D.
性別 (女子ダミー)	女子=1、男子=0	0.483	0.500
成績 (全国)	5段階	2.229	1.053
高校グループ (基準：Cグループ)			
Aグループダミー	Aグループ=1、その他=0	0.466	0.499
Bグループダミー	Bグループ=1、その他=0	0.182	0.386
上昇志向度	8段階	7.270	1.420

モデルⅦ (「ASUC職希望」モデル)		平均値	S.D.
性別 (女子ダミー)	女子=1、男子=0	0.537	0.499
成績 (全国)	5段階	2.263	1.043
高校グループ (基準：Cグループ)			
Aグループダミー	Aグループ=1、その他=0	0.499	0.500
Bグループダミー	Bグループ=1、その他=0	0.163	0.369
ASUC職希望ダミー ASUC職希望=1、非ASUC職希望=0		0.287	0.453

モデルⅡ (「やりたいこと重視指導」モデル)		平均値	S.D.
性別 (女子ダミー)	女子=1、男子=0	0.481	0.500
成績 (全国)	5段階	2.227	1.052
高校グループ (基準：Cグループ)			
Aグループダミー	Aグループ=1、その他=0	0.461	0.499
Bグループダミー	Bグループ=1、その他=0	0.183	0.387
やりたいこと重視指導ダミー あてはまる=1、あてはまらない=0		0.505	0.500

モデルⅣ (「手に職 (希望職明確)」モデル)		平均値	S.D.
性別 (女子ダミー)	女子=1、男子=0	0.484	0.500
成績 (全国)	5段階	2.222	1.052
高校グループ (基準：Cグループ)			
Aグループダミー	Aグループ=1、その他=0	0.464	0.499
Bグループダミー	Bグループ=1、その他=0	0.181	0.386
希望職明確ダミー 明確である=1、明確ではない=0		0.532	0.499

モデルⅥ (「勉強拒否」モデル)		平均値	S.D.
性別 (女子ダミー)	女子=1、男子=0	0.485	0.500
成績 (全国)	5段階	2.299	1.048
高校グループ (基準：Cグループ)			
Aグループダミー	Aグループ=1、その他=0	0.510	0.500
Bグループダミー	Bグループ=1、その他=0	0.192	0.394
勉強&挑戦ダミー あてはまる=1、あてはまらない=0		0.690	0.463

参考表2 多項ロジットの分析結果一覧

モデルⅠ	基本モデル(メリトクラシーモデル)					
	四大		短大		就職	
	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.
基準: 専門学校						
性別(女子ダミー)	-1.117***	0.190	1.406**	0.566	-0.630***	0.238
成績(全国)	0.338***	0.107	0.582***	0.213	-0.077	0.152
高校グループ(基準:C)						
Aグループダミー	3.770***	0.373	-1.139	1.105	-1.071	0.806
Bグループダミー	0.742***	0.205	-1.197**	0.575	-1.148***	0.337
定数	0.136	0.234	-3.813***	0.678	0.175	0.298
N	1,209					
df	12					
-2 Log likelihood	202.183					
Chi-Square	587.884***					
McFadden quasi-R ²	0.282					

モデルⅢ	「学歴≠実力視」モデル					
	四大		短大		就職	
	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.
基準: 専門学校						
性別(女子ダミー)	-1.144***	0.193	1.362**	0.568	-0.628***	0.240
成績(全国)	0.344***	0.107	0.538**	0.219	-0.101	0.153
高校グループ(基準:C)						
Aグループダミー	3.792***	0.374	-1.081	1.104	-1.033	0.806
Bグループダミー	0.749***	0.207	-1.463**	0.643	-1.135***	0.337
学歴=実力視ダミー	0.400**	0.188	0.026	0.422	0.156	0.238
定数	-0.049	0.247	-3.702***	0.707	0.138	0.315
N	1,199					
df	15					
-2 Log likelihood	303.711					
Chi-Square	586.450***					
McFadden quasi-R ²	0.284					

モデルⅤ	「脱・上昇志向」モデル					
	四大		短大		就職	
	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.
基準: 専門学校						
性別(女子ダミー)	-1.046***	0.192	1.722***	0.637	-0.583**	0.241
成績(全国)	0.309***	0.108	0.575***	0.215	-0.087	0.153
高校グループ(基準:C)						
Aグループダミー	3.775***	0.374	-1.116	1.105	-1.070	0.806
Bグループダミー	0.750***	0.208	-1.207**	0.579	-1.150***	0.338
上昇志向度	0.160**	0.067	-0.079	0.155	-0.005	0.084
定数	-1.005*	0.526	-3.530***	1.291	0.201	0.647
N	1,190					
df	15					
-2 Log likelihood	541.422					
Chi-Square	586.511***					
McFadden quasi-R ²	0.287					

モデルⅦ	「ASUC 職希望」モデル			
	四大		就職	
	B	S.E.	B	S.E.
基準: 専門学校				
性別(女子ダミー)	-0.986***	0.278	-1.051***	0.366
成績(全国)	0.266*	0.154	-0.118	0.233
高校グループ(基準:C)				
Aグループダミー	4.168***	0.514	-0.546	1.141
Bグループダミー	0.772***	0.297	-0.544	0.469
ASUC 職希望ダミー	-0.562**	0.275	-0.425	0.366
定数	-0.166	0.370	-0.013	0.488
N	547			
df	10			
-2 Log likelihood	167.432			
Chi-Square	309.687***			
McFadden quasi-R ²	0.349			

モデルⅡ	「やりたいこと重視指導」モデル					
	四大		短大		就職	
	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.
基準: 専門学校						
性別(女子ダミー)	-1.137***	0.192	1.364**	0.567	-0.651***	0.240
成績(全国)	0.323***	0.107	0.570***	0.213	-0.084	0.153
高校グループ(基準:C)						
Aグループダミー	3.766***	0.374	-1.083	1.105	-1.750	1.072
Bグループダミー	0.783***	0.208	-1.176**	0.576	-1.114***	0.338
やりたいこと重視指導ダミー	0.319*	0.188	-0.323	0.437	0.061	0.241
定数	0.009	0.247	-3.643***	0.692	0.160	0.313
N	1,195					
df	15					
-2 Log likelihood	306.093					
Chi-Square	595.159***					
McFadden quasi-R ²	0.289					

モデルⅣ	「手に職(希望職明確)」モデル					
	四大		短大		就職	
	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.
基準: 専門学校						
性別(女子ダミー)	-0.928***	0.203	1.558***	0.570	-0.444*	0.247
成績(全国)	0.404***	0.116	0.645***	0.218	0.002	0.157
高校グループ(基準:C)						
Aグループダミー	4.071***	0.421	-0.902	1.122	-0.811	0.828
Bグループダミー	0.734***	0.219	-1.233**	0.580	-1.158***	0.344
希望職明確ダミー	-1.423***	0.209	-1.061**	0.424	-1.273***	0.252
定数	0.780***	0.273	-3.281***	0.712	0.757**	0.332
N	1,185					
df	15					
-2 Log likelihood	300.618					
Chi-Square	640.715***					
McFadden quasi-R ²	0.314					

モデルⅥ	「勉強拒否」モデル			
	四大		短大	
	B	S.E.	B	S.E.
基準: 専門学校				
性別(女子ダミー)	-1.086***	0.191	1.399**	0.566
成績(全国)	0.338***	0.109	0.571***	0.214
高校グループ(基準:C)				
Aグループダミー	3.656***	0.378	-1.000	1.113
Bグループダミー	0.705***	0.207	-1.209**	0.576
勉強&挑戦ダミー	0.239	0.190	-0.397	0.425
定数	0.020	0.252	-3.598***	0.687
N	1,079			
df	10			
-2 Log likelihood	196.877			
Chi-Square	397.477***			
McFadden quasi-R ²	0.308			

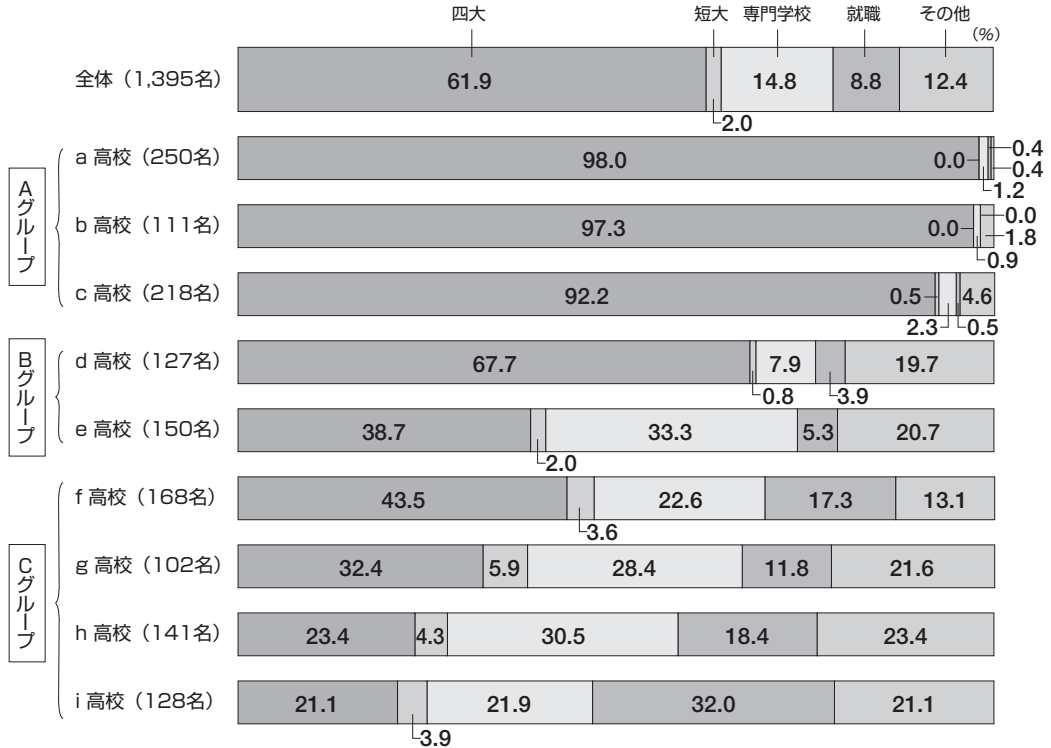
注1) *: $p < 0.100$, **: $p < 0.050$, ***: $p < 0.010$, ****: $p < 0.001$ 。

注2) I~VII すべてのモデルが0.1%水準 ($p=0.000$) で有意であった。

網掛けは有意差のある変数に付した。

参考図 1 調査対象校別 卒業後の希望進路

(χ^2 検定: $df=32$, $p=0.000$)



参考表 3 高校のタイプ別にみた希望する職業

(いずれも χ^2 検定: $df=2$, $p=0.000$)

	希望する職業		合計
	明確である	明確ではない	
Aグループ (591名)	56.2%	43.8%	100.0%
Bグループ (290名)	45.5%	54.5%	100.0%
Cグループ (579名)	45.6%	54.4%	100.0%
全体 (1,460名)	49.9%	50.1%	100.0%

	希望する職業の種類 (希望職明確者のうち)		合計
	ASUC職業	非ASUC職業	
Aグループ (295名)	16.6%	83.4%	100.0%
Bグループ (111名)	39.6%	60.4%	100.0%
Cグループ (232名)	42.2%	57.8%	100.0%
全体 (638名)	29.9%	70.1%	100.0%